

イルゼ・アイヒンガーの

『私が住んでいるところ』(一九六三年) について

ライナー・ケネツケ 著
竹 岡 健 一 訳

■ 作品

私は、昨日から一階下に住んでいます。私は、大きな声で言いたくはないのですが、下に住んでいます。私は、引越したのではないので、それを大きな声で言いたくはありません。私は、昨晚、土曜日の晚いつもそうしているように、コンサートから帰って来、前もってドアを開け、明かりのボタンを押してから、階段を上りました。私は、なにも知らずに階段を——エレベーターは戦争以後動いていないのです——上り、四階まで来たとき、「もうここだったらいのに」と思い、そして一瞬、エレベーターのそばの壁にもたれたのです。いつも、四階で、一種の疲労が私を襲い、それが私に、もう階段を四つ上ったはずだと考えさせることもあります。ところが、このとき、私はそう考えず、上にもう一階あることをわかっていました。ですから、私は、最後の階段を上るために、再び目を開けたのですが、その瞬間、エレベーターの左側のドアに、表札が見えたのです。私は勘違いをしていたので、もう階段を四つ上っていたのだろうか？私は、階を表示している板を見つめました。が、丁度そのとき、明かりが消えてしまいました。

イルゼ・アイヒンガーの『私が住んでいるところ』(一九六三年) について

明かりのスイッチは、廊下の反対側にあるので、私は、暗闇の中を、私のドアまで二歩あるいて、開けました。私のドアまでだって？でも、でなければ一体だれのドアなのか？私の名前がその上についていたのだから。私がもう階段を四つ上ったに違いない。

ドアもまた、なんの抵抗もなく、すぐに開き、私はスイッチを見つけ、明かりのついた玄関に、私の玄関に立っており、すべてはいつも通りでした。つまり、とつくの昔から変えようと思ってた赤い壁紙、そのわきへ寄せられた長椅子、そして左手には台所への通路。すべてはいつも通りでした。台所には、私が夕食のときそれ以上食べなかつたパンが、まだパン入れの中がありました。すべては変わらないままでした。私はパンを一切れ切り取り、食べ始めましたが、しかし、入ったとき廊下へ出るドアを閉めなかつたことを急に思い出し、それを閉めるため、玄関に戻りました。

そのとき、玄関から廊下へ差した明かりの中に、階を表示した板が見えました。そこには、四階と書いてありました。私は駆け出し、明かりのボタンを押し、もう一度それを読みました。それから、私は、他のドアの表札を読みました。そこには、それまで私の下に住んでいた人たちの名前がありました。そこで、私は、それまで私の隣に住んでいた人たちの隣に今だれが住んでいるのかを、それまで私の下に住んでいた医者が、本当に今私の上に住んでいるのかを確かめるため、階段を上ろうとしましたが、しかし、私は急にすっかり気力を失い、ベッドへ行かざるをえませんでした。

それ以来、私は目を覚まして横たわり、明日はどうなるだろうと思案しています。起きて、上がって行って、確かめたくなるのですが、いまだにときおりあります。でも、私はあまりにも気力をなくしていますし、上の廊下の明かりの中から、だれかが目を覚まして出てきて、「ここでなにをお探ですか？」と私に聞くということもありえます。そして、私のこれまでの隣人からなされるこの質問をとて恐れているため、私は、出来ればここに横たわったままでいたいです。昼間の光の下では、上がって行くことがもっと難しいとわかっているにもかかわらず。

隣では、私のところに住んでいる大学生の呼吸が聞こえます。彼は造船専攻の学生で、深く、規則正しく息をしています。彼は、なにが起こったか知りもしません。彼はなにも知らず、私は目を覚ましてここに横たわっているのです。私は疑問に思います。私が明日彼に聞くかどうか。彼はほとんど外出しません。だから、私がコンサートへ行っていた間、彼はたぶん家にいたはずです。もしかしたら、私は、掃除婦にも聞くかも知れません。

いや、私はそんなことはしない。私に聞かない人に、私は一体どのように聞けばいいのか？私は一体どのようにその人に近づいて、「私が昨日一つ上の階に住んでいなかったかどうか、ひよつとしてご存じでしょうか」などと言えばいいのか。そして、それに対して、その人はなんと言えばいいのか？だれかが私に聞くだろう、だれかが明日私にこう聞くだろう、という希望があります。つまり「済みませんが、あなたは昨日一つ上の階に住んでいなかったのじゃありませんか」と。しかし、私が知っているところでは、掃除婦は聞かないでしょう。でも、私の以前の隣人の一人が聞くかも知れません。「あなたは昨日、もう私たちの隣に住んでいなかったでしょう」と。あるいは、私の新しい隣人の一人が聞くかも知れません。しかし、私が知っているところでは、彼らはだれも聞かないでしょう。だから、私には、まるで私が生涯一階下に住んでいたかのように振る舞う以外、どうしようもないのです。

私は疑問に思います。もし私がコンサートに行っていないのであればどうなっただろうと。でも、この問いは、今日から、他の一切の質問と同様、無意味になりました。私は、寝つくよう努力するつもりです。

私は今、地下室に住んでいます。私の掃除婦がもう炭を取りに下りる苦勞をしないで済むことが利点です。炭は私たちの隣にあるのですから。そして、彼女はそのことにすっかり満足しているようです。私は、彼女は非常に快適だから聞かないのではないかと疑っています。彼女は掃除をあまりにも手軽に考えていましたが、ここではいいいよもつてそうです。

炭の粉を一時間毎に家具から掃くことを彼女から要求するなど、滑稽でしょう。彼女は満足しており、私には彼女の様子からそれがわかるのです。そして大学生は、毎日、口笛を吹きながら地下室の階段を上がり、夕方戻って来ます。夜、私には、彼が深く、規則正しく息をしているのが聞こえます。私は、いつの日か彼が、彼が地下室に住んでいることを奇妙に思う女の子を連れて来ることを望んでいます。でも、彼は女の子を一人も連れて来ません。

また、それでもなくとも、だれも聞きません。ガタガタと大きな音を立てて、地下室の中で左へ右へと荷物を下ろしている炭運びの男たちは、私が階段で彼らに出会うと、帽子を取って、挨拶します。私がそばを通り過ぎるまで、彼らが袋を下ろし、立ち止まっていることもしばしばです。それどころか、管理人も、私が門から出て行く前に私を見ると、感じよく挨拶します。初め一瞬の間、私は、彼がこれまでよりも感じよく挨拶していると思いました。でも、それは思い過ぎでした。地下室から上がると、いろいろなものが、前より感じよく見えるものなのです。

通りで、私は立ち止まり、外套から炭の粉を払いましたが、しかし、ほんのわずかながら残りました。それは、私の冬の外套でもあり、黒っぽい色をしています。市電の中で私を驚かせるのは、車掌が私を他の乗客と同じように扱い、だれも私から離れないことです。私は疑問に思います。もし私が下水溝に住むことになればどうなるだろうと。と言うのも、私は徐々にこの考えに慣れて来ているからです。

地下室に住んで以来、私は、コンサートにもまた、夕方たびたび出かけます。たいていは土曜日に。しかし、しばしば週の間にも。結局私は、私が出かけないことによっても、私がある日地下室にいるということが起きないようにすることは出来ませんでした。今、私は時折、私自分が責めたことを、私が初めこの下降を関連づけたすべての事柄をいぶかしく思います。初め、私はいつもこう考えたのです。「もし私がコンサートに、またはあちらへワインを一杯飲みに出かけさえしていなければ。」今、私はもうそのようなことは考えません。地下室に来て以来、私の心は落ち着き、飲みたくな

るや否や、ワインを飲みに出かけます。下水溝の中の蒸気を恐れるのは無意味でしょう。というのも、それなら、私はまさに地面の中の炎を恐れなければならないでしょうから。——恐れを抱かねばならなくなるものが多すぎます。たとえば私が絶えず家にいて、一步も通りへ出なくとも、いつの日か、私は下水溝にいることでしょう。

私は疑問に思います。私の掃除婦がそれについてどう言うだろうとだけ。いずれにせよ、それは、換気することから彼女を解放しもうするでしょう。そして大学生は、口笛を吹きながら下水溝の昇降口を上り、再び下りるのです。私は疑問に思います。そうなれば、コンサートとグラス一杯のワインはどうなるだろうかとも。そして、もし大学生が女の子を連れてくることをまさに思いついたとしたら？私は疑問に思います。私の部屋は下水溝の中でもやはり同じかどうかと。これまでは、同じでした。でも、下水溝の中では、家はなくなります。そして、部屋と台所と客間と大学生の部屋という区別が、地面の中でできるとは、私には思えません。

しかし、これまでは、すべて変わらないままです。壁の赤い上張りとその前の長持ち、台所への通路、壁に掛かったすべての絵、古い安楽椅子、および本棚——その中にあるすべての本。外にあるパン入れと窓辺のカーテン。

ただし窓は、窓は変わりました。私はこの時間たいてい台所で過ごしており、台所の窓は、以前から廊下に面していたのですから。その窓は、いつも格子が入っていたのです。私は、そのために管理人のところへ行く理由はありません。眺めが変わったからと言って、行く理由はなおさらないのです。当然、彼は私にこう言うことができるでしょう。眺めは住居の一部ではありません。賃貸料は、大きさには関係がありますが、眺めには関係ないのです。彼は私に、あなたの眺めはあなたの問題です、と言うことができるでしょう。

そして、私が彼のところへ行くこともありません。彼が感じよくさえあれば、私は嬉しいのです。私が文句をつけることが出来るただ一つのこととは、たぶん、窓が半分小さくなったということでしょう。しかし、そうすると、彼は、地下室

では他にしようがないのですと、またもや私に反論するでしょう。そして、それに対して、私は答えられないでしょう。ちよつと前までは五階に住んでいたのです、それに慣れていないのだと言うことさえ、私には出来ないでしょう。それなら、私はもう四階で苦情を訴えねばならなかったでしょう。今となつては、もう遅いのです。

(出典 イルゼ・アイヒンガー『私の言葉と私——物語』フィッシャー文庫版出版社〔フランクフルト・アム・マイン〕一九七八年。)

■ 解釈

一、略伝と著作に関する指摘

イルゼ・アイヒンガーは、一九二一年十一月一日、双子の姉ヘルガ・ミヒエとともに、ヴィーンに生まれた。彼女の両親は、教師とユダヤ人の女医であつたが、すでに一九二六年に離婚し、イルゼ・アイヒンガーは、ヴィーンの母親のもとで育つた。マトウーラ（大学入学資格試験）終了後、彼女は、半ダヤ人であつたため、ナチスに迫害され、大学での学業に着手できなかつた。戦後始められた医学の勉強を、彼女は、五学期の後中断し、執筆に専念した。小説『より大きな希望』が一九四八年に出版されたS・フィッシャー出版社で、彼女は、その都度短期間、原稿審査員として働き、それと並んで、ウルム造形大学で助手として働いた。一九五一年春、イルゼ・アイヒンガーは、作家ギンター・アイヒ（一九〇七—一九七二年）と知り合い、一九五三年に結婚し、彼との間に二人の子供がある。

イルゼ・アイヒンガーの比較的乏しい作品の中心にあるのは、散文である。すでに言及した唯一の小説『より大きな希望』の中で、彼女は、ユダヤ人の子供たちの運命を例として、ナチスの独裁政治の恐怖、つまり迫害と戦争と取り組んで

いる。この小説と並んで、彼女は、かなりの数の物語を書いているが、そのうち一九七六年までに発表されたものが、作品集『私の言葉と私』（一九七八年）にまとめられた。その中には、とりわけ次のようなものが含まれている。すなわち、有名になり、イルゼ・アイヒンガーが一九五二年に四七年グループ賞を受賞する対象作となった『鏡の話』、また、かなり頻繁に学校で読まれる物語『窓辺の芝居』、『開封された命令書』、『私の緑色のロバ』、および、以下で解釈される、一九六三年成立の物語『私が住んでいるところ』である。

夫のギュンター・アイヒと同様、イルゼ・アイヒンガーもまた、ラジオドラマを執筆した。とりわけ『ボタン』（一九五三年）、『牧師館訪問』（一九六二年）、『オストエンデの午後』（一九六八年）、および『オー克蘭ド』（一九七〇年）——それぞれ放送時期の年があげられている——である。それと並んで、彼女は、ラジオのための対話も書いた。

作品集『悪い言葉』（一九七六年）には、物語と短編と並んで、『海辺の駅』^{ガイル・マリタイム}というラジオドラマも含まれている。一九八七年の『クライスト、苔、キジ』は、物語、短編、回想（『手記 一九五〇〜一九八五年』をまとめたものである。この作家は、その叙情詩集を、作品集『さずけられた忠告』として、一九七八年に発表した。

時としてカフカを思い出させるイルゼ・アイヒンガーの物語は、たいてい寓話として構想されており、多様な方法で、現実と現実経験との間の逆説的な関係をテーマとしている。それと並んで、彼女の作品で繰り返し問題となっているのは、自我と、その不十分さを彼女が呼び起こしている言葉との間の分裂である。

この作家は、数々の文学賞で名誉を与えられた。すでに言及した四七年グループ賞と並んで、彼女は、一九五七年、自由ハンザ都市ブレーメン市文学賞を、一九七一年に、ネリー・ザックス賞を、またガンデルスハイム市のロスヴィータ・メダル（一九七五年）を、ゲオルク・トラークル賞（一九七九年）、およびバイエルン芸術アカデミーの大文学賞（一九九一年）を受賞した。

イルゼ・アイヒンガーは、今日、ヴィーンに住んでいる。

二、形態的特徴

二、一、短編の構造

『私が住んでいるところ』の外面的構造は、空白によって視覚的に区別された、ほぼ同じ長さの二つの章をなしている。この空白は、両部分の順序によって、時間的飛躍を、そしてまた、それぞれの最初の文における「階」ないしは「地下室」という場所の指示に基づいて、空間的な飛躍をも際立たせている。

物語は、さし当たりならんら怪しげなところのない状況記述（「私は、昨日から一階下に住んでいます。」）で、突然始まる。その状況の特異性は、続く二つの文によって、実際に説明されるというよりは、むしろつつましやかに誓約される。このようにして、ある種の緊張が生み出される。それから、四番目の文（「私は、昨晚、土曜日の晚いつもそうしているように、コンサートから帰って来、〔……〕。」）でもって、かなり長い回想が始まる。それは、過去時称で語られており、前の晩の奇妙な発見を取り上げている。

晩に訪れたコンサートから帰る途中、語り手は、驚いたことに、彼の住居が、もはやアパートの五階にではなく、四階にあるのを見出す。最初の疑念の後に生じる確信、すなわち、問題なのは勘違いではなく、不気味な現実であるという確信は、すでに、筋のクライマックスとみなされうる。——次第に下降するその後の段階は、物語の経過における根本的な変化ではなく、ゆるやかな変化をなしているに過ぎない。この説明し難い変化の理由を追求する「氣力を失い」、語り手は、ベッドへ赴く。

ところで、第五節の冒頭での、現在時称への再転換（「それ以来、私は目を覚まして横たわり、明日はどのようなだろう

と思索しています。」は、「昨日」と「明日」との間の夜の現在のという語り立場を、正確に際立たせている。それは、時間的のみならず、同時に運命的な転換点を意味している。つまり、語り手は、この不本意な転居の結果についての、詳細な、と同時に重要でない思い悩みに身を委ねるばかりで、しかもそれは、「私は寝つくよう努力するつもりです」という決心でもって、漠然と終わるのである。

『私が住んでいるところ』の第二部は、またもや突然に、第一部と同じ様な表現で始まり、その間に生じた時間的・空間的变化を、と同時に語りの新しい現在の時点を認識させる。つまり、「私は今、地下室に住んでいます。」第一章と第二章との間に時間的に横たわっている経過は、すでに言及した切れ目によって視覚的に、ならびにもつとあとの箇所での「私がある日地下室にいる」というわずかな指摘によって、言葉の上でも要約されている。物語の第一部とは違い、第二部は、もはや回想を含んでいない。最初の三つの節において、語り手は、むしろ、彼の周囲の人々（掃除婦、また借り人の大学生、炭運びの男たち、管理人、乗客、車掌）が、始まった変化に、期待された、ないしは期待されるべきやり方で反応しないということの問題にしている。そのさい、彼は、ついでのように中断して、彼の住居が「下水溝」にあるとした場合の未来を想像している。すでに物語の第一部の終わりの方でそうであったように、掃除婦と大学生の予想される振る舞い方が熟考され、地下室で窓が小さくなるという以外、これまで「変わらない」ままの住居に、下水溝ではどのような変化が生じるかという問いが、詳しく思い浮かべられる。

これらの考えはすべて、絶えず、自己を慰撫する試みに伴われている。管理人に苦情を言うという、検討に委ねられた可能性も、すぐまた拒絶される。語り手に最後に残るのは、彼の状況が変え難いという認識である。物語は、「今となつては、もう遅いのです」という、諦めの、と同時に落ち着かせる確認でもって結ばれる。「下降」がどこで終わるのが明らかにならないという限りにおいて、開かれたまま。

二、二、語りの態度と言葉

『私が住んでいるところ』は、作中人物に反映する一人称の語り手によって朗読される。物語の構造形式、つまり二つの部分の時間的連続によつて、予め連続性が設定されているにもかかわらず、その語り手の不明確な立場には、語りの空間的・時間的な基準点がない。むしろ、語り手の「私」は、時間的跳躍によつて区別された二つの異なる現在時点を提示し、それらから、過去が振り返られたり、未来が予見されたりする。その上、物語の二つの部分において、作中人物に反映する物語る「私」の息づまるような直接性が感じられるため、読者は、日記の叙述形式を想起させられるように感じる。それに相応しい形態上の枠、例えば連続する日付が欠けているにもかかわらずである。『私が住んでいるところ』のスタイルも、全体として、本当の日記に見出されうる信憑性に相応している。つまり、そのスタイルは、日常語で統一されており、一見したところ、作為的な印象をまったく与えない。自発的に、見分けられうる距離なしに、思考があつさりと言葉にされるのである。それによつてまた、日記の書き手に相応しい自発性という印象も引き起こされる。それどころか、時折、この書き手・語り手は、修正しつつ、自分の発言を遮る。「もしかしたら、私は、掃除婦にも聞くかも知れません。いや、私はそんなことはしない。」一気に書かず、二度始めるこの語り手の虚構によつて、物語の非完結性という性格が、効果的に強調される。

物語の中心にあるのが、出来事よりも、むしろ語り手の「私」であることを、『私が住んでいるところ』の最初の五つの文章が暗示している。それらが、首句反復により、「私」で始まることによつて、これによつて、外面的筋の反映として、内面的筋が有する中心の意味が強調される。しばしば質問形式で出される内的独白は、不慣れな、不気味な現実経験を目の当たりにして、語り手の「私」が晒されている緊張を模写している。つまり、「私は勘違いをしていたので、もう階を四つ上がっていたのだろうか？」語り手は、彼の混乱と自信のなさを、追体験できるように表現するため、先行する

文の一部を、質問形式で再び取り上げる。「私は、〔……〕私のドアまで二歩あるいて、開けました。私のドアまでだつて？でも、でなければ一体だれのドアなのか？」直接の追体験は、大変短い文と大変長い文の交替によつても達成される。箱入りの従属文、および多くの反復と、それによつて生じる回りくどさに基づいてすでに、次の文では、謎めいた発見を目の当たりにした語り手を襲う気力のなさが、追体験可能となる。「そこで、私は、それまで私の隣に住んでいた人たちの隣に今だれが住んでいるのかを、それまで私の下に住んでいた医者が、本当に今私の上に住んでいるのかを確かめるため、階段を上ろうとしましたが、しかし、私は急にすっかり気力を失い、ベッドへ行かざるをえませんでした。」

すでに言及した「私」による首句反復の頻用と並んで、その他にも首句反復の頻用が見られる。それらは、語り手である「私」の内面の状態、彼の確信のなさ、不安、運命への服従を強調している。すなわち、*“Er hat keine Ahnung von dem, was geschehen ist. Er hat keine Ahnung, und ich liege hier wach. Ich frage mich, ob ich ihn morgen fragen werde.(...) Aber wie ich meine Aufwärmefrau kenne, wird sie nicht fragen. Oder einer meiner früheren Nachbarn:(...) Oder einer meiner neuen Nachbarn. Aber wie ich sie kenne, werden sie alle nicht fragen.”*（彼は、なにが起つたか知りもしません。彼はなにも知らず、私は目を覚ましてここに横たわっているのです。〔……〕しかし、私が知っているところでは、掃除婦は聞かないでしょう。でも、私の以前の隣人の一人が聞くかも知れません。〔……〕あるいは、私の新しい隣人の一人が聞くかも知れません。しかし、私が彼らを知っているところでは、彼らはだれも聞かないでしょう。」なお、原文の斜体による強調は訳者。）それと並んで目立っているのは、一連の質問であり、それによつて、語り手の「私」は、考えられうる自己非難に対して、予め用心して、自分を弁護する。つまり、「私に聞かない人に、私は一体どのように聞けばよいのか？〔……〕それに対して、その人はなんと云えばよいのか？」修辞上の質問という衣に包まれ、それによつて信用を失わされることによつて、根本においては実に意義深くさえあるこれらの熟考は、見事に抑圧されうる。それらの問いが出される当人が語り手

の「私」自身であり、それゆえ異議を恐れる必要がないのだから、なおさらである。

自分自身に対する疑いに対して、自分の行為、ないしは自分が行為しないことを防衛する目的に、接続法の構文も役立つている。それらは、一方では、おそらくは望ましい行為に関する心配に関連しており（“und es könnte auch sein, daß von dem Licht im Flur da oben einer erwache und herauskäme und mich frage:(...)”）「上の廊下の明かりの中から、だれかが目を覚まして出てきて、[……]と私に聞くということもありえます。」なお、原文の斜体による強調は訳者）、他方では、（非現実の形で）ありうる間違い、ないしは不履行に触れている（“Ich frage mich, was geschehen wäre, wenn ich das Konzert gelassen hätte.”）「私は疑問に思います。もし私がコンサートに行っていないなければどうなっただろうと。」なお、原文の斜体による強調は訳者）。ここでは、接続法の利用は、「この問い」を「無意味」として片づけ、脇へやる機能を有している。物語の最後から二番目の節では、自己の受動性が、接続法で構想された虚構の対話でもって、正当化されている。その対話は、それゆえに忌まわしい議論のさいの、誤ってそう思われた管理人の優越を証明するべきものである（“Er könnte mir mit Recht sagen, (...) Er könnte mir sagen, (...)”）「当然、彼は私にこう言うことができるでしょう。[……]彼は私に、[……]と言うことができるでしょう。」なお、原文の斜体による強調は訳者）。語り手がますます自己の中に引きこもり、ますます寡黙になることは、次の点から読みとられうる。つまり、物語の第一部でたった二度しか用いられていない「私は疑問に思います」という首句反復が、第二部では、すでに四度姿を現していることである。告白されると同時に抑圧される自分自身に対する疑念は、それらの不条理すれすれの現れを、「私は疑問に思います。私が明日彼に聞くかどうか」という、すでにほとんどグロテスクで愚かしい気分させる表現の中に見出している。

三、登場人物

『私が住んでいるところ』は、本質的には、不十分な筋に包み込まれた自画像として読まれる。したがって、語り手の「私」と並ぶ登場人物たちは、ここでは可能な限り無視されてよい。いずれにせよ、彼らは、語り手の「私」の大変主観的な眼鏡を通して見られるに過ぎないのである。ここでは、ある種の独白の形で自分の存在を知らせている「私」が、中心的登場人物として、より詳しく考察されねばならない。

読者は、この登場人物の内面を大変詳しく聞き知るが、それに対し、彼の外面的状況については、ごくわずかな知らせしか受け取らない。例えば、この語り手が何歳なのかは、決して明らかにならない。それどころか、問題となっているのが男性か女性かさえ、不確かなままである。なるほど、中年の、ひよつとしたら寡婦となった女性が思い浮かべられるかも知れない。つまり、彼女は、あまり孤独な生活をしないように、造船専攻の大学生をまた借り人として受け入れたのである。彼女、ないしは彼が、経済的にそれほど窮していないことは、掃除婦が言及されることから裏づけられる。コンサートへ行くことが繰り返し触れられることは、文化的な関心を、と同時におそらくある程度の教養を暴露している。しかし、語り手の「私」の通常的生活状態について、読者は、それ以上聞かない。そのため、平均的、一般的な人間だという印象が生じる。

これに対し、物語の最初の文は、外面的状況に関係している。すなわち、「私は、昨日から一階下に住んでいます。」しかし、転居という、さし当たりほとんどセンサーショナルではないこの確認の根拠が与えられる前に、語り手の「私」は、「それを大きな声で言いたくはありません」と、彼の羞恥を認識させる。新しい居住状況は、彼にとってはまったく不快なのであり、可能であれば、彼はそのことを一切黙っているであろう。にもかかわらず、彼がそれを口にすることが、不安と罪悪感を推測させ、告白が間近に迫っていることを窺わせる。

それに続く、前の晩の出来事の回想は、この疑念を裏づけ、語り手の「私」の本質に関する重要な情報を与える。つまり、彼は、階段を上るさい、四階の高さでいつも彼を「襲」う「一種の疲労」を告白する。この疲労に対しては、さし当たり身体的理由（病氣と年齢）も仮定されえよう。しかし、その直後、むしろ衝動の弱さがその根底にあることが明らかになり、それは、他の事柄においても表れる。すなわち、彼が壁紙を「とつくの昔から変えようと思っていた」ことが、ついでのことのように口にされるのである。明らかに、語り手の「私」は、一度始まった状態に進んで満足し、本来行われるはずの「壁紙変更」を、願望と予定として放置したまま、その都度ずっと延期する人間なのである。

この気力のなさは、最終的に、もう一つの啓発的な関連においても表れる。語り手の「私」は、その新しい居住状況の奇妙さをもはや自らに対して否定できなくなった後、究極的に確かめる力を、上の階へ行く力を見出さない。つまり、突然始まる「気力のなさ」は、その理由を、彼が隣人の質問を恐れているという点にしか持っていないのである。この「気力のなさ」は、表面的には、他人との接触に対する弱さの表れであり、核心においては、深刻な自我の弱さの証明である。話しかけられ、それによって、自分の答えを通じて恥を晒すよう強いられることに対する不安が、語り手の「私」を絶えず駆り立てている。そのため、彼は、自分の住居における驚くべき発見の後、引きこもり、避難所であるベッドに即座に入る。その中では、彼は、——自分の質問に対して以外は——安全なのである。周囲の人々、隣人、また借り人、あるいは翌日掃除婦に聞く代わりに、彼は、自分自身にだけ質問し、それらの質問を、——本当に安心することがないまま——取るに足らないものとして非難する。ごく一般的な言い回し（「私が知っているところでは、〔……〕」）を用いながら、彼は、彼の周囲の人々を評価できると思いこむ。質問しつつ彼らに近づく必要から自らを解放するためにである。彼の先入観は、彼にとって、自己の受動性に対する便利な口実となる。それは、彼には大変重要であり、彼は、遅くとも地下室では相当悪化する自分の居住状況を受け入れるのみならず、自分を騙すことによって、利点として称賛しさえするのであ

る。

ごくはつきりしているのは、語り手の中に徐々に生じる変化である。物語の第一部における回想は、羞恥と困惑をまだ感じさせた。しかし、第二部では、それらはもはや認められない。新しい状況の導入の叙述（「私は今、地下室に住んでいます。」）にすぐ続いて述べられるのは、あらゆる批判的異議に予め対処させられるべき正当化である。つまり、「……」が利点です。」私たちは今、掃除婦が彼女の仕事を「あまりにも手軽に考えて」いたことを、まったくついでのことのように聞き知る。しかし、そのことは、明らかに、それ以前にも、叱責にも、解雇にもいたらなかった。いい加減な掃除婦もまた地下室で「満足して」おり、このようにして、相応しい葛藤が避けられうることは、語り手の「私」にとって大変多くの意味を持っている。そのため、彼は、自分の状況から単になにか良いことを勝ち取ることができれば、それでどこか、その状況を自分に対して強く弁護するのである。彼はまた、そのことを管理人との衝突へともたらしたくもない。彼は、本来なら相応しい対話を、ただ思考の中で思い浮かべるだけである。あらゆる種類の見かけの理由づけで、その対話を現実においては取りやめさせることができるように。周囲の人々の彼に対する評価がはつきりとは変化せず、外套の上の炭の粉にもかかわらず、市電の中で自分が避けられないので、彼には、地下室の住居に満足するのは、簡単なことである。

語り手の「私」は、彼の心配全体を、彼自身の願望にではなく、彼の周囲の人々の彼に対する反応に捧げる。彼らに近づく必要がないようにである。目立たないままだが、彼が自分の状況の奇妙さを無視しているので、彼は、徐々に自ら消えて行く。責任のなさ自分をごまかすこと——この二つの形でその結果が明らかになる彼の自我の弱さは、彼を下水溝の中で消滅させ、最終的には、地面の中で溶けて無くならせるのである。

四、短編の意味内容

構造分析が示したように、『私が住んでいるところ』は、短編のよく知られた型をなしている。ただし、短編が「蓋然性」という美的カテゴリーに従うべきだということを基本的に考えるなら、イルゼ・アイヒンガーのこの物語は、このジャンルに決して分類されえない。つまり、外面的経過は、そのように起こりそうなものではなく、謎めいているため、論理という手段、および現実的な説明の試みでは、解釈されえないのである。この状況は、さし当たり、次のことを示している。すなわち、ここで問題となっているのが、その意味を他のレベルで明らかにする謎めいた寓話だということである。したがって、すでに題名で出された私が住んでいる場所についての問いは、外面的状態よりも、むしろ内面的状態に、つまりは心的・精神的観点において、私の中心がどこにあるのかという問いに関係していると推測されうる。

仮にまず出来事の経過に依拠した場合、確認されうるのは、だれかが「予期せず」、自分と無関係に、突然、自分が住んでいないところに住んでいるのを見出したということである。しかしながら、思いがけず私が晒されたこの変化が、まったく意に反したことであるかどうかは、すでに疑われてよい。というのも、語り手の「私」は、階段を上るさい、「いつも」、四階で、「もうここだったらいのに」という考えが生じると告白しているからである。その考えが、今、不安にするやり方で、一気に現実となったのである。住居の場所は、突如として、私がそれを望むことに慣れた場所にある。――願望に、内面の考え方に、現実としての実現が従ったのである。

つまり、外面的な居住状況の変化は、変化への告白されていない、内面的な願望の表れに過ぎないと言いうことができよう。しかし、その願望と欲求を自分の力で貫徹できないことにより、私は、私の場所、すなわち「私が住んでいるところ」を外部から規定する不可解な力のなぶりものとなる。この変化は、「下降」の第一段階では、まだ受け入れられうるものだったかも知れない。というのも、今では、階段を上るのが前より辛くなくなり、階が変わることで甘受されねばならな

い短所はないからである。その限りでは、実際的な見地から見れば、背後関係についての情報を得るため、周囲の人々に問い合わせる差し迫った必要は、事実ない。ところが、第二部の初めでもって、この考え方が致命的なものだったことが、明らかになる。それ以上背後を探られない力——それは隠された願望の鏡として理解されるのだが——に従うという一度示された用意は、阻止できない下降を引き起こすのである。

今、「私」はまったく抵抗を考えず、むしろ外部から規定された状況と妥協する。しかし、この妥協を自分自身に対して正当化するためには、今や、内面の態度を外面的変化に合わせ、内面世界と外面世界とを再び互いに調和させることが不可欠である。地下室に、そしておそらくはやがて下水溝に住まねばならないという状況に、「私」は、次のようにして適応する。つまり、始まった、それどころか期待された変化から、一部には不条理な仕方、なにか良いことを獲得しようとすることによってである。この下降の第一歩ではまだ見られた疑念と躊躇は、今や徹底的に抑圧される。「初め、私はいつもこう考えたのです。へもし私がコンサートに、またはあちらへワインを一杯飲みに出かけさせなければ。」今、私はもうそのようなことは考えません。地下室に来て以来、私の心は落ち着き、「……」。語り手の「私」がいつか足下の地面を失った後には、底知れないものへの転落は、もはや避けられえない。——いずれにせよ、彼はそれを自分に成功だと信じ込ませるのである。

啓発的なのは、大学生と掃除婦の態度である。彼らは変化に気づいていないかのような、あるいは彼らにとって変化は本当にどうでもよいことであるかのような、そういう印象を受けるかも知れない。ただし、この見解は、受動的で不安な「私」の視点に適合するに過ぎない。彼らは聞かないという、非難として表現された推測（「しかし、私が知っているところでは、掃除婦は聞かないでしょう。」）は、なるほど真実であることが明らかになるが、しかし、もちろん、第一には、当の「私」に向けられている。その推測は、投影なのである。つまり、他の人が聞かないから、自らも聞かず、この

循環的な、独善的な構造の中に横たわっている、論理的・道徳的矛盾に気づくことも、そもそもないのである。それゆえ、大学生と掃除婦は、語り手の「私」の似姿に他ならない。

そこから推論されうることは、悪い、最終的には致命的なものとなる変化を、疑いを抱くことなく甘受する、個人的のみならず、一般的な用意が、無口な人々みなと同様に引き込まれる没落の原因だということである。隣人との対話に対する恐れが大きくなり過ぎると、明らかにアブノーマルなものが、ノーマルだと認められ、正当化される。その上、担当の管理人、つまり権力の代理人との葛藤は避けられるべきなので、誤って避けがたいと思われたものに従うのである。地下室への転居の以後、管理人が「感じよい」ようにも思われるのだから、なおさらである。

この寓話的短編でもって、イルゼ・アイヒンガーが描いているのは、個人的に自分を騙すことを経て、集団的な変化へ、と同時にまっすぐ破滅へといたる心の状態、ないしは心のメカニズムである。語り手の「私」は、この結果を受け入れる。というのも、彼は、「地面の中の炎」を、すなわち、比喩的に言えば「地獄」を恐れないからである。

ここで問題となっている物語は、ごく一般的に、悪しき権力の下での無責任、勇気のなさ、自発的服従に向けられている。その悪しき権力は、さし当たり自己の意志の表れとして、偽装して登場しており、それゆえ、後に、それがエスカレートした段階では、もはや他人の意志として捉えられようとはしないのである。もちろん、ここでは、最近のドイツの歴史への具体的な関連が、はっきりと把握されうる。語り手の「私」は、ナチズムの支配下での多くの人間と同じように振る舞う。彼らは、当初独裁制に同意したため、その結果をもちや免れえなかつた。つまり、彼らは、同調者であることを、そして歴史に関連づけて言えば没落を、自らに正当化するように思われる世界像を考え出した。その没落には、きわめて悪い形で表れた場合でもなお、なにか肯定的なものが、あるいは少なくとも不可避性がつきまわっており、それが「落ちて」させるのである。『私が住んでいるところ』を不安にさせるやり方で書くことにより、イルゼ・アイヒンガーは、こ

の致命的な落ち着き、この宿命論に反対しているのである。

付記

この翻訳の底本は、Rainer Könecke: Interpretationshilfen deutsche Kurzgeschichten 1945-1968. 12 Texte und Interpretationen. Sekundarstufe 2. Stuttgart/ Dresden: Klett 1994, S. 150-163, „Ilse Aichinger: Wo ich wohne (1963)“である。原文においてイタリック体で強調されている箇所は、訳文ではゴシック体で表記した。『私が住んでいるところ』の訳は筆者の知る範囲では本邦初訳であり、また訳文に関しては、いわゆるこなれた訳よりも、解釈の部における文体的特徴についての指摘が日本語でも理解できるよう工夫することを優先した。なお、解釈で使用された「語りの態度」に関する概念の理解については、拙訳「ヴォルフガング・ボルヒェルトの『パン』(一九四六年)について」(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第五二号〔平成十二年〕、四一―六〇頁)の「付記」(五九―六〇頁)を参照されたい。